

こだま新聞

第177号

平成22年7月

日本の歯周病治療 1

石川純という人がいます。この人は日本の歯周病治療の近代化を進めた一人です。

大正11年東京の生まれで、東京高等歯学校（現在の東京医科歯科大）の大学院時代（昭和33年）に奨学金を得て当時もともと歯周病の先進的な研究をしていた米国タフツ大学のグロスマン教授に2年間師事し帰国しました。グロスマンの厳しい指導の下で動物実験をしていて大失敗をしました。その経験から食べ物の硬さが歯肉炎、歯周病の発生に大きな影響を及



北大時報Webから

ぼしていることを学びました。

昭和30年代は歯周病は歯槽膿漏と呼ばれていた時代で、治療法が分からないため患者さんに「体質に問題があるから」と説明していたようです。したがって治療も対症療法（症状を緩和する治療）が主流で歯周病を治す治療は行われていませんでした。石川氏も米国に渡る前までは歯石を除去したり、腫れた歯肉を除去したりしていたそうです。

帰国した当時の彼を知る人から「石川君は渡米して歯ブラシ一本だけ持って帰ってきた」と揶揄されていたと聞いたことがあります。

日本に帰った石川はさらに研究を進めるために京都大学の霊長類研究所に通って野生のニホンザルと飼育されているニホンザルを比較する研



究を始めました。

その調査の結果、野性のサルには虫歯も歯肉炎もほとんど見られないこと、それに比較して飼育された期間が長ければ長いほど虫歯や歯肉炎が見られることが分かりました。また歯石については野性のサルは高齢であっても歯石がまったく付着していない個体も多数見られたそうです。その原因は食べ物に原因があると考え、今度は食生活の調査をしています。

野生のサルは木の実よりも木の葉を枝つきのまま手に持ち、葉をしごき取るようにして食べているそうです。食餌の

割合では木の葉が40%、果実が20%、樹皮が15%だそうではあり木の葉がかなりの割合を占めています。

ところでサルにスイカを出したらどこから食べるか分かりますか。最初に種、それから実の部分を食べるそうです。種に栄養があること知っているのでしょうか。

（石川純著「人間はなぜ歯を磨くか」から）

続く

町で国際結婚式

先月、6月26日に八郎潟



教会でアメリカ人のジャックさんとフィリピン人のアナリザさ

んの結婚式が行われました。教会で結婚式が行われるのは久しぶりだそうです。きっかけはアナリザさんと八郎潟町の日本語教室の交流です。ジャックさんの家族は代々6月26日に結婚式を行ってきたそうで、この日に結婚式を開催できる場所として八郎潟教会が選ばれました。披露宴は防災センターで行われました。

挙式から披露宴まですべて手作りの結婚式。参加した日本人には目新しいことばかりでしたがアメリカでは普通だそうですよ。

今月の行事

7月の行事

- 9日 郡学校保健会総会
- 11日 参議院選挙投票日
- 11日 おもしろ市場
- 19日 海の日
- 22日 1歳半歯科健診
- 23日 小中夏季休業
- 29日 乳児健診